18 世紀アイルランドの改良思想とリネン業

― R・スティーブンソンの政策提言に関する史料分析 ―

竹　田　　泉

筆者はこれまで 18 世紀のアイルランド・リネン業を主要テーマとして研究をおこなってきた。そのなかで，18 世紀中葉にアイルランドのリネン業政策の重心が上質リネン部門から粗質リネン部門にシフトしたこと，またその政策転換に影響を与えたのが，リネン・ボード (Board of Trustees for the Linen and Hempen Manufactures in Ireland)[1] の検査官ロバート・スティーブンソン (Robert Stephenson) の政策提言にあったことを明らかにした[2]。彼は，1757 年出版の『アイルランドのリネン業の状態と進展についての一調査』[3] においてリネン業政策に対する自身の考えを示しているが，それは，それまでの政策の変遷や，文献の分析をおこなった上で構築されたものであった。以下では，彼が『アイルランドのリネン業の状態と進展についての一調査』でとりあげた文献 10 点とその関連史料を実際に分析することを通じて，18 世紀アイルランド・リネン業政策の思想的背景を考察する上での論点を提示する。

1）　当時のアイルランド総督オーモンド公により，80 名（アルスター，レンスター，マンスター，コナハトの各地方 20 名ずつ）の評議員が任命された。彼らは，アイルランド・リネン業促進のために，議会から拠出された資金の運用を託された。Conrad Gill, *The Rise of the Irish Linen Industry*, Oxford, 1925, p. 66 参照。

2）　竹田泉『麻と綿が紡ぐイギリス産業革命 ― アイルランド・リネン業と大西洋市場 ―』ミネルヴァ書房，2013 年。

3）　Robert Stephenson, *An inquiry into the state and progress of the linen manufacture of Ireland. In which will be introduced remarks on the principal transact ions of the trustees of the linen board*, Dublin, 1757.

I

1 つ目の文献は，フィンズ・モリソン (Fynes Moryson) 著の *An history of Ireland, from the year 1599 to 1603: With a short narration of the state of the kingdom from the year 1169. To which is added, A description of Ireland*, vol. 2 (Dublin, 1735)[4] である。モリソンは，エリザベス治世時代，マウントジョイ男爵であったチャールズ・ブラント (Charles Blount) がアイルランド総督のときに彼の秘書を務めた人物であった[5]。スティーブンソンは，この文献で，エリザベス治世以前からのアイルランドにおける亜麻栽培と亜麻糸・亜麻布製造やその取引の状況を確認している[6]。

2 つ目の文献は，ジョセフ・ボーモント (Joseph Beaumont) の *Mathematical sleaing-tables* (Dublin, 1712) である。ボーモントは，ミーズ州トリムの雑貨商であり，ジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift) と友人関係にあったようである[7]。

タイトルにある‘sleaing’というのは，現代の綴りで言えば，‘slaying’もしくは‘sleying’であり，織機の付属具である筬に経糸を通すことを意味する[8]。この文献はこの筬通しについて，どのような寸法の布を織る時にどのくらいの糸の量を使うかをまとめたものである。タイトルの後半部分では[9]，その‘sleaing’が「リネン織布の偉大で唯一の技」であり，それを説

4）　第 1 巻のはじめに購読者のリストが掲載されているが，リチャード・コックスが購読者の一人にあがっている。
5）　モリソンは旅行家でもあり，『旅程』(*An itinerary ... containing his ten yeeres trauell through the tvvelue dominions of Germany, Bohmerland, Sweitzerland, Netherland, Denmarke, Poland, Jtaly, Turky, France, England, Scotland, and Ireland*. London, 1617.) を著している。小林麻衣子「英国人のグランドツアー：その起源と歴史的発展」*Booklet* 18（慶應義塾大学アート・センター），2010 年，38 ページも参照。
6）　Stephenson [1757], pp. 37, 108, et passim.
7）　Eugene Hammond, *Jonathan Swift: Irish blow-in*, Newark, 2016, p. 138.
8）　*Oxford English Dictionary Online* より。
9）　タイトルの後半部分は以下のとおりである。*Or, The great and only mistery of*

明することによって何も知らない織布工に糸に筬を合わせる方法を確実に指導できるし，買い手も布がうまく仕上げられているかどうかを判断できるという。このボーモントの筬通しの計算は，アイルランドの一般的な織布工にとって非常に役に立つものであるとルイ・クロムラン (Louis Crommelin)[10] によって認められ，下院とリネン・ボードの命を受けて出版される運びとなった[11]。

スティーブンソンによれば，ボーモントの計算は最良のオランダ製ホーランド (Holland) という布を真似てつくられる丈夫なリネンの生産についての数値を示したものであって，この基準で織られていない，様々な幅の，様々な目の細かさの，様々な名称の，様々な市場向けのリネンは，ボーモントには粗悪で無用なもの (bad and unserviceable) と考えられているという。またアイルランドでこのテーマで書かれてきたものは，ホーランドなどの上質リネンのみを対象とするという路線を継承しており，リネン・ボードはこうした文献の提案に沿った政策を打ち出して資金をばらまいてきたとも指摘する。このリネン・ボードによる多額の支出は，スティーブンソンにいわせれば，アイルランドのリネン業の実態に即したものではなかったというのである[12]。

3 つ目の文献は，トマス・ターナー (Thomas Turner) の *New methods of*

---

weaving linnen-cloth explain'd. By which the most ignorant weaver is infallibly directed how to adjust the reed to the yarn: and the buyer truly shewn whether the cloth be wrought to its due perfection. Taken from geometrical proportions, and fitted to the meanest capacity. Published by the special order of the Honourable the House of Commons, and by order of the Honourable trustees for the improvement of the linnen manufacture in this Kingdom. To which is added, an abstract of all the statutes now in force, relating to the linnen manufacture.

10） 従来は，クロムランに代表されるユグノー移民がアイルランド・リネン業の中で果たした役割は高く評価されていたが，現在では副次的な役割しか果たさなかったとする見方が主流となっている。(L. M. Cullen, *An Economic History of Ireland since 1600*, London, 1976, p. 60 や W. H. Crawford, *The Impact of the Domestic Linen Industry in Ulster*, Belfast, 2005, Chap. 3 など)。

11） Beaumont [1712], an unnumbered page.

12） Stephenson [1757], pp. 108-109.

improving flax and flax-seed and bleaching cloath (Dublin, 1715) である。ターナーは 1662 年にラーガンで生まれたクエーカー教徒であった[13)]。注目したいのはまず，スティーブンソンが，ターナーが推奨する道具類は簡単に供給できるものであると，実用性の観点からこの文献を評価している点である。第 2 に，漂白技術に関して，ターナーは，ホーランドのような高級なリネンではない比較的粗質のダウラス (Dowlas)，テープ (Tapes)，ティック (Ticks) と呼ばれる布も取り上げ，それらに適した糸の漂白方法を説明しているのだが，それに対してスティーブンソンは，その漂白方法は（この文献の出版から約 40 年たった）現在はすでに全ての貧しい女性に知られていると指摘している[14)]。

4 つ目の文献は，アーサー・ドブス (Arthur Dobbs) の *An essay on the trade and improvement of Ireland* (Dublin, 1729) である。スティーブンソンも指摘するとおり[15)]，この文献はリネン業も含めたアイルランド経済に関わるさまざまなデータが掲載されており，さらにそれに分析が加えられた上で，政策提言がなされている。

ドブスは，ダブリンの知的サークルに属し，後に出てくるプライアとともにダブリン協会の創設に関わった人物である[16)]。政界での活動も目立ち，1727 年からアントリム州キャリックファーガスの下院議員を務めただけでなく，1754 年にはアメリカのノースカロライナ植民地の総督となっている[17)]。

この文献は，2 つの部に分かれており，スティーブンソンが出版年としてあげている 1729 年は，第 1 部が出版された年である。第 2 部の出版は

13） Crawford [2005], pp. 26-27.
14） Stephenson [1757], p. 114.
15） Stephenson [1757], p. 115.
16） James Livesey, ‘The Dublin Society in Eighteenth-Century Irish Political Thought’, *The Historical Journal*, 47, no. 3, 2004, p. 617.
17） ドブスの経歴については *Oxford Dictionary of National Biography* (Online) などを参照。

その 2 年後の 1731 年出版である。第 2 部のページ数が付されていない冒頭部分に献呈の辞が収められているが，ここから，ドブスがこの文献を執筆した経緯が明らかとなる。ドブスは関税簿を見る機会に恵まれたというが，それによってアイルランドの商業や製造業が国際的な関係の中でどのように存立しているかについて理解できたという。この文献は，この理解をもとに，アイルランドを改良する方法についての彼の考えが論じられたものとなっているが，アイルランドの製造業に貧民を雇用することとアメリカ植民地を含むイギリス帝国全体の経済力の増進とが結びつけられているところに彼の主張の特徴があるといえよう。

ドブスのリネン業に関わる提言[18)]でまず注目したいのは，食糧問題の観点からリネン業を議論している点である。毛織物と違ってリネンはほとんどの国が多かれ少なかれ製造しているものであるから，リネンを製造する国は競争相手が多くなる。それゆえに，製造に携わる人たちが食糧を合理的な価格で安定的に入手できるということは，彼らの賃金（請負仕事の価格），さらには彼らがつくる製品の安定的で合理的な価格設定につながり，安定的な利益を得ることを好む商人は，同程度の質のものでも安定的で決まった価格の製品を供給する国と優先的に取引をおこなうだろうというわけである。

2 つ目は，リネン業の各生産工程がバランスをとって存立することの重要性が示されている点である。上で述べた賃金や儲けに関しても，特定の生産工程に過分に多く配分されると他の工程の発展を阻害してしまうので，それぞれの工程でおこなわれる生産活動にかかる時間や難易度に応じて合理的に配分されるべきであることが強調されている。

3 つ目は，自発的な団体の役割に注目している点である。こうした組織が，糸市場の監督・規制をおこない，織布工を安定的に雇用し，無駄や損

18） Arthur Dobbs, *An essay on the trade and improvemeat of Ireland*, Part II, Dublin, 1731, pp. 74-77.

のないように糸を仕分けるのがよく，また，そうした組織同士の競争が，最終製品である布の質を向上させると主張した。

5つ目の文献は，*The Dublin Society's weekly observations*, vol. 1 (Dublin, 1739) に収録されてある1737年の書簡である。この『ダブリン協会週次報告書』（以下，『報告書』）は，ダブリン協会が毎週火曜日に特定のテーマを検討した記録をまとめたものであり，1737年の書簡は検討材料の一つとして収録されている。

『報告書』の冒頭ではまず，個人の書斎や私室にある書籍に詰め込まれた農業の改良やその他の情報や知識を世のために広く活用すること，すなわち，他の方法ではその入手が難しいであろう大衆の農業従事者や製造業者にそれらをわかりやすく提供することが出版理由として説明されている。また，ダブリン協会は新しい実験や観察についての情報や批判的な意見を収集することにも熱心であり，こうした行動が真にこの国を愛する人の行動であると主張するのである[19)]。

1737年の書簡では，オランダやフランダースの亜麻栽培が紹介されているが[20)]，それに対してスティーブンソンは，考慮すべきはむしろ人，気候，土地であるという[21)]。ここ以外でも基本的に彼は，外国の方法や政策をそのままアイルランドに取り入れることには慎重な姿勢をみせており，アイルランドの改良のためには，人々の気質や精神，貧困の状態，陸上輸送にかかる高いコストなどアイルランドの実情を考慮した政策の必要性を説くのである[22)]。またスティーブンソンは，*A letter from a merchant who has left off trade, in relation to the British and Irish linen manufactures* という別の文献から，イングランド，アイルランド，スコットランド，アメリカの植民地の人口から算出されたそれぞれの地のリネン消費量の推計値とその

19）*The Dublin Society's weekly observations*, 1739, pp. 3-8.
20）*The Dublin Society's weekly observations*, 1739, pp. 68-73.
21）Stephenson [1757], p. 115.
22）Stephenson [1757], p. 123.

リネンの供給地が示された表を引用し，イングランドが実はアイルランドやスコットランドよりも多くのリネンを生産していることに対して危機感を持つよう促している[23)]。

1738 年に出版されたというこの文献は，スティーブンソンによって「非常に独創的で器用な」人物によって書かれたと説明されるが，この人物は，デイビッド・ビンドン (David Bindon) だと思われる。この文献の再版と思われるものが 1753 年に出版されている。この 1753 年の文献は，*A letter from a merchant who has left off trade, to a Member of Parliament. In which the case of the British and Irish manufacture of linen, threads, and tapes, is fairly stated; and all the Objections against the Encouragement proposed to be given to that Manufacture, fully answered* (London) であり，タイトルが少し違っているが，スティーブンソンが引用した表とほとんど同じものが掲載されているため版は違うが同じ文献だと判断して良さそうである。

ビンドンはこの文献で，自分はすでに引退した身であるから公平な立場で意見をいうことができると主張した上で，イギリスとアイルランドのリネン業の促進のためには，植民地向けに再輸出される外国製リネンへの戻し税の廃止を訴えている。

6 つ目の文献は，*Remarks on the present state of the linnen-manufacture of this kingdom. And queries relating to the further improvement thereof. Humbly addressed to the right hon*^{ble} *Henry Boyle, Esq; speaker to the Commons of Ireland* (Dublin, 1745) である。著者は不明であるが，リネン・ボードのメンバーによって書かれたものであるという。スティーブンソンは，リネン・ボードの資金の使用に関わる数値など有用な情報が含まれているとこの文献を評価している[24)]。

この文献の主要なテーマとなっているのは亜麻の入手問題であり，それ

23） Stephenson [1757], p. 119.
24） Stephenson [1757], p. 124.

はアイルランドの改良の土台だと主張される。その上で，国内での亜麻および亜麻仁（種子）生産が重要であり，それには技術や労働力を要しコストもかかることから，奨励策が必要であると説かれた[25)]。

この文献で注目したいのは次の点である。第1に，現行法が粗質リネンに目配りしていない点や幅寸法が足りないリネンが市場に出回っている問題に目配りしている点である。第2に，カソリックをいかに働かせるかが課題であるというが，現在の問題は，貧困者の怠惰だけではなく上流階層の人々の贅沢にもあると主張している点は興味深い。第3に，毛織物業とリネン業のどちらが利益をもたらし，多くの人を雇用するのかという論争に対して，イギリスは毛織物（業）を私たちに譲り渡すことはないのであるから，それを切望したり不満を言ったりするのはやめにして，持っているもの，すなわちリネン（業）を有効に活用しよう，と説いている点である[26)]。

7つ目の文献は，トマス・プライア (Thomas Prior) の *An essay to encourage and extend the linen manufacture in Ireland, by premiums and other means* (Dublin, 1749) である。プライアはダブリン協会の創設者の一人であり，スティーブンソンは彼の見識を高く評価している。この文献はそのタイトルにあるとおり，奨励金やその他の方策によって，アイルランドのリネン製造を促進し拡大させるために書かれたものであり，亜麻栽培から仕上げ工程までリネン業のあらゆる工程が詳細に考察・分析されている。

文献の冒頭部分から，リネン業をとりあげる理由が明らかとなる。プライアによれば，リネン業はこれまで多くの奨励を受けてきており，アイルランドの主要産業に成長した。よって，それをより一層促進させることは好意的に受け取られるはずであるという[27)]。またリネン業は，多くの貧し

25）*Remarks...*, 1745, p. 16.
26）*Remarks...*, 1745, pp. 4, 5, 16-19.
27）Prior [1749], p. 3.

い人々に仕事を与えるものであるし，アイルランドで自給できる原料を用い，国内ではなく輸出市場で常に需要のある製品を生み出すものであるという。毛織物業との違いは，最終製品に対する原料の価値の割合である。その割合は，毛織物が 4 分の 1 から 5 分の 1 であるのに対して，リネンは 7 分の 1 から 8 分の 1 であり，リネン業の方が有利であるとされた。すなわち，リネン業の促進は国に多くの富をもたらす産業であると主張するのである[28)]。

プライアの議論で注目したいのはまず，地主の果たす役割に期待しているという点である。所領の改良によって地主に利益はもたらされるが，それはそこに住む人たちの勤労に依存していた。小作世帯の女性や子供が働ける環境を整えること，この場合，具体的には，原料である亜麻と亜麻を紡ぐ道具である紡ぎ車を与えること，また，生産された糸を買い上げ糸商人に販売することは，最終的には地主の私的な収入を増加させると説明された[29)]。

第 2 に，まだリネン業が存在しない，もしくは未熟な段階にある地域への具体的な奨励策を示している点である[30)]。そういった地域は市場が未発達であるために，人々は原料を入手したり糸を売ったりすることができない。そのために上述のように地主がその役割を果たすことが求められた。しかし，次第に糸商人がその地に糸を求めるようになると市場が形成されるから，紡ぎ手は地主を通さなくても糸を売ることができるようになるという。こうした糸市場が常に安定的に存在することこそが，「リネン業が確立する唯一の確かな土台」[31)]であり，川下工程である織布や漂白もおこなわれるようになるというのである。奨励すべきはまず原料入手と紡績工程であり，それらを無視して織布工程を奨励して失敗した例も示されてい

28） Prior [1749], pp. 3-5.
29） Prior [1749], pp. 7, 27, et passim.
30） Prior [1749], pp. 13, et passim.
31） Prior [1749], p. 27.

る[32)]。

第3に，粗質リネンにも目配りしている点である。実際に粗質リネン業への奨励は亜麻の大量輸入と紡ぎ手と織布工の増大をもたらしたという。また，粗質リネンに対する需要は大きく，イングランドから植民地への輸出には奨励金が与えられることにも注目している[33)]。これに対してスティーブンソンは，プライアがパウンド・ヤーン[34)]や1重量ポンドあたり36カット（36番手）より下の糸からつくられるリネン製造を考慮に入れていないと批判している。スティーブンソンは，それらが公共の利益となるし，リネン業の一分野としての資格を持つものであるとして，プライアがとりあげる粗質リネンの範囲を下方に拡大するべきだという考えをここで打ち出している[35)]。

8つ目の文献は，1749年5月15日付のリチャード・コックスからトマス・プライアへの書簡 (*A letter from Sir Richard Cox, Bart. to Thomas Prior, Esq; shewing, from experience, a sure method to establish the linnen-manufacture, and the beneficial effects it will immediately produce*) である。これはダブリンで出版された後，ロンドンとボストンで再版されたことが1750年のボストン版の表紙からわかる。

コックスは，コーク州の地主で，1727年から1766年まで下院議員を務めている[36)]。積極的な改良主義者で[37)]，プライアが期待するような地主であった。この書簡からは，当時の改良主義的な地主がリネン業育成にどの

32） Prior [1749], p. 28.
33） Prior [1749], pp. 12-13.
34） この時代，パウンド・ヤーンとは通常，1重量ポンドあたり24カット（24番手）に満たない糸のことをさしていた。当時の亜麻糸の番手や質の表現については，竹田泉 [2013]，175～177ページを参照。
35） Stephenson [1757], p. 130.
36） G. Rees, ‘Sir Richard Cox, 1702-66: Patriotism and Improvement in Mid-Eighteenth-Century Ireland’, *Eighteenth-Century Ireland / Iris an Dá Chultúr*, 29, 2014, p. 48.
37） Rees [2014].

ように取り組んだか，その実態をうかがい知ることができる。実際この書簡が，アイルランドだけでなくイギリスやボストンでも出版されていることから，コックスの経験は改良運動の一つの見本と見なされていたといえる[38)]。

コックスはプライア（ダブリン協会）の提言を[39)]，自身の所領で実践していったわけであるが，そのなかで注目したいのはまず，リネン業の奨励が貧しい人々の状態を改善する手段であるという考えを持っている点である。第 2 に，毛織物業と比較してリネン業の方が利益が大きいと判断したという点である。その理由は，周辺で悲惨な状態にあるのは毛織物業に携わっている人であることと，イギリスが私たちから取り上げた毛織物業よりも，リネン業のほうがイギリスから優遇され奨励されるからだという。第 3 に，アイルランドの地主は大抵リネン業について無知だと主張している点である。コックスは，アイルランド北部のアルスターの人材に指導を依頼したが失敗したことを告白しながら，自分もはじめはリネン業の知識やそれを遂行するためのスキルがほとんどなかったと述べている[40)]。

第 4 に，亜麻栽培から紡績・織布までの各生産工程，およびその製品の売買に対して，バランスのとれた奨励が必要だと説き，実際に下に示すような奨励策を打ち出していた[41)]。

38） ボストン版の冒頭の辞を執筆した人物は，アイルランドとこの地の状況は全く一緒ではないが同じ点が多々あるので，この書簡の内容がボストンでも役立つと考えた。彼は，コックスのことを真の愛国精神を抱く地主であり，彼が書いた書簡は，それまで存在しなかったところに有益な製造業を興し，促進し，確立する最も安易で合理的な方法，すなわち，彼が経験した失敗を避けたり障害を取り除く最良の方法を示してくれていると評している。*A letter from Sir Richard Cox...*, Boston edn., 1750, pp. 3-4.

39） コックスは冒頭で，書簡の宛て人であるプライアに対して，「あなたが公衆に示してくださった教えの有用性の様々で明らかな証拠をこの書簡の中で見つけることができるでしょう」と述べている。Prior [1749], p. 5.

40） *A letter from Sir Richard Cox...*, Boston edn., 1750, pp. 11-12.

41） *A letter from Sir Richard Cox...*, Boston edn., 1750, pp. 18-20.

一年のうちで最も多くの亜麻を栽培しドレッシング（引用者：亜麻繊維の準備作業のひとつ）をした者に6ポンド
2番手に4ポンド

前の週に自分が紡いだ糸で最も多く最も質の良い糸を市場で販売に出した者に2シリング2ペンス
2番手に1シリング1ペンス
一年のうちで最も多く1番手の報奨金を獲得した紡ぎ手に1ポンド
年ごとの報奨金を2回連続で獲得した紡ぎ手に3ポンド

最も多くのリネンを織った親方織工 (Weaver) に5ポンド
最も多くのリネンを織った職人織工 (Journeyman) に2ポンド
最も多くのリネンを織った見習い織工 (Apprentice) に1ポンド

ダンマンウェイの市で7月のはじめの火曜日に30ポンド以上で最も多くのリネンを購入した者に5ポンド
2番手に3ポンド
最も多くのリネンを売った者に3ポンド
2番手に2ポンド

さらに，町に移り住む人や見習い徒弟にも報奨金が支払われることになっていた。しかし，その対象はプロテスタントに限られていた。

第5に，こうした奨励を貧しい人々がリネン製造を自律的に遂行できるようになるまでの施策だと考えている点である。コックスはリネン業に携わる者すべてを，後代もずっと存続し地主のきまぐれに影響されない製造業者にすることを目指していた。自力で生活の糧を稼がせることは，下層民の貧困を撲滅するだけでなく，彼らの生活レベルやマナーを向上させることにもつながるとされた。さらにいえば，こうした小作人の貧困問題の解決は，最終的には地主の所領の価値を増大させ，彼ら自身の収入の増加

をもたらすとも主張された[42)]。

9 つ目の文献は，*A Letter to his excellency Henry Boyle, esq. speaker of the honourable House of commons in Ireland. With remarks on the linen trade and manufactures of this kingdom, and some hints for promoting the same* (Dublin, 1753) である。この文献には著者名がつけられていないが，最後に‘N. A.’と名前の頭文字が記されている。*Eighteenth Century Collections Online* 収録のものにつけられている書誌情報によれば，この文献の著者は N. Archdall となっており，これはニコラス・アーチドール (Nicholas Archdall: 1690-1763) のことだと思われる。彼は 1731 年からファーマナーの下院議員を務めた人物である[43)]。

スティーブンソンは，この文献がリネン・ボードの資金がリネン業奨励のために適切に使用されているかを検討している点に着目している。特に原料である亜麻について，外国からの輸入を後押しする政策を見直し，代わりに国内での亜麻栽培に適切な奨励を与えるべきであると主張されている[44)]。

最後の文献は，上の 9 つ目の文献に反論して出版された *Observations on the linen manufacture of Ireland* (Dublin, 1755) である。‘J-n G-ne, Esq.’と著者の名前の一部が伏字となっているが，この人物はウォーターフォードに近いキルケニー州のグリーンビル (Greenville) のリネン業振興に携わったジョン・グリーン (John Greene) であろうか。そうであれば，大規模な漂白場を所有していたとして，1760 年代初頭にスティーブンソンがアイルランドを廻ってリネン業を調査した際のレポートにも登場している[45)]。

42） *A letter from Sir Richard Cox...*, Boston edn., 1750, pp. 27-28, 30.

43） Somerset Richard Lowry-Corry, *Parliamentary Memoirs of Fermanagh and Tyrone, from 1613 to 1885*, Dublin, 1887, pp. 56-57.

44） Stephenson [1757], p. 134.

45） Robert Stephenson, *The reports and observations of Robert Stephenson, made to the Right Hon. and Honourable the Trustees of the Linen Manufacture, for the years 1760, and 1761. Distinguishing the state of the spinning and weaving in each county,*

Ⅱ

以上の分析から得られた論点は以下のとおりである。下の丸囲み数字は上の何番目の文献かを示している。

第1に，スティーブンソンが，リネン業の粗質部門を重視しているという点が，ここでも明らかとなった。彼は，ボーモント（②）が上質リネンのみを対象としている点に着目するが，それは，リネン・ボードのリネン業政策の方向性に対する反発からであった。リネン・ボードは，クロムランに代表されるユグノー移民の上質リネン製造を奨励する立場をとり，それに多額のリネン資金をつぎ込んだのであるが，スティーブンソンはその点を，⑥や⑨の文献にあるデータをもとに追及しようとしている。粗質部門には，プライア（⑦）も目配りしているが，スティーブンソンの構想はより具体的であり，また粗質部門の範囲をプライアが想定するよりも下方に引き伸ばす必要があるとした。

このことは，スティーブンソンが，実態に即した現実的な方策を打ち出そうとしている点と関連する。これが第2の論点である。彼は例えば，ターナー（③）が実用的な道具を推奨した点を評価しているし，プライア（⑦）が地域によって異なるリネン業の発展の度合いを考慮すべきだと述べている点に着目している。コックス（⑧）は，自身の所領にリネン業を導入しようとした際，当初リネン業先進地域のアルスターの人材に指導を依頼したが失敗したことを告白している。スティーブンソンは，リネン業後進地域には，クロムランのやり方を手本にするのではなく，粗質部門の奨励が現実的な方策だと唱えるのである。そうすることによってはじめてアイルランド全体のリネン業の発展が可能になると考えた。

---

respectively; as also what species of the manufacture they are employed in, the progress made by the inhabitants, and how the most immediate and effectual improvements are likely to the obtained, in the several branches thereof throughout the kingdom. Printed by order of the board., Dublin, 1762, pp. 18, 22, 24.

第 3 に，あとの時代の文献の方に各生産工程間のバランスを意識した主張が目立つ点である。リネン業の生産工程は原料である亜麻生産からはじまり，繊維の準備工程，紡績工程（糸生産），織布工程（布生産），その販売へと進むが，あとの時代の文献ほど，それらの有機的な結合が重視されていることがうかがえる。コックス（⑧）が試行錯誤の結果打ち出したリネン業奨励策は，亜麻生産から布の販売までを包括するものであった。また，ドブス（④）やプライア（⑦）にも同様の主張が確認できる。

亜麻の自給問題が盛んに議論されているのもこの点に関連する。原料である亜麻の輸入は，外国へ金銀を流出させるとして問題視されたばかりでない。紡績工程以降の安定的な発展のためには，糸や布の生産を担う貧しい人々が，安定的に原料を入手できる環境をつくらなければならないとする。彼らが住む土地には，原料を売り買いできる市場がほとんど存在しないため，近隣での亜麻生産を促したり，地主が原料を供給したり，市場を整備したりすることが求められたのである。その際も，上の第 2 の点で述べたように，大陸ヨーロッパのやり方ではなく，それぞれの地にあったやり方を導入することが唱えられるようになった。

第 4 に，アイルランド・リネン業の発展をイギリス帝国の枠組みでみる視点が取られている点である。まずは，アイルランド・リネン業が，イギリスおよびそのアメリカ植民地との商業関係の中で，いかに利益を追求できるかといった点が考察される。例えば，プライア（⑦）が指摘するように，イギリスからの輸出奨励金の恩恵が受けられる点や，ビンドンが強く要求するような，外国製リネンがイギリスに一旦輸入されてアメリカ植民地へ再輸出される際の輸入関税の払い戻しの廃止がそれにあたる。また，ドブス（④）に特徴的であるが，アイルランド・リネン業の発展が，イギリス帝国全体の経済力増進につながるという視点もあった。

第 5 に，イギリスの毛織物業とアイルランド・リネン業との関係を両国の政治的な問題との関連でどうみるかという問題である。アイルランドか

らの羊毛製品の輸出禁止を定めた1699年法 (10 & 11 Will. III, c. 10) をきっかけに，イギリスからの政治的独立を求める議論のなかで毛織物業を取り戻そうとする運動が展開した。しかしながら，例えば⑥で唱えられているように，18世紀中葉においては，イギリスが毛織物（業）を私たちから奪ったことを甘んじて受け入れ，今持っているリネン（業）を有効に活用しようとする立場がアイルランドのプロテスタント・エリート層の間で主流となっていた[46)]。第4の論点で触れたイギリスからの輸出奨励金を利用することもこの枠組みで理解できよう。また，プライア（⑦）やコックス（⑧）にみられるように，毛織物業よりもリネン業を発展させることの方が，アイルランドの利益を増進させることにつながるとする主張も目立つ。

プロテスタント・エリート層にとってリネン業を発展させることはすなわち，アイルランドを改良 (improvement) することと同義であった。さらに，ダブリン協会の『報告書』（⑤）でも示されているように，それは愛国主義的な行動であるとされたのである。ダブリン協会は，知的な交流を通じて，経験や観察結果を収集し，過去の間違いの修正をおこなった。また，そうして蓄積された有用知識は，実際にリネン業にたずさわる人々に広く還元され，それはコックスのような愛国主義的な地主によって実行に移されたのである。彼らは，自身の所領に住む貧しく怠惰な小作人を亜麻栽培や紡績，織布に従事させることによって，彼らに生活の糧を与え，勤労を根付かせ，生活態度を改善させるといった経済的かつ道徳的な改良を施そうとしたのである。その対象の多くはカソリックであった。スティーブンソンが1760年代初頭にアイルランド全域を調査した際，小作人に亜麻や紡ぎ車などの道具を供給するだけでなく，生産された糸や布の販売を担う地主がいたるところで確認されているが[47)]，それはプライア（⑦）やコックス（⑧）が述べるように，リネン業の土台づくりであり，最終的にはそ

46）　例えば，Rees [2014], p. 49 を参照。
47）　Stephenson [1762].

の自律的な成長が目指されたのである。また，こうした公益を目指す改良運動が，地主の私的な利益追求とも不可分に結びついていた点も注目に値する。